

死化粧 渡辺淳一



角川文庫

昭和四十六年五月二十日
昭和五十二年八月三十日
初版発行
十六版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

死し 化け 粧しょう

著作者

渡辺淳一わたべ じゅんいち

発行者

角川春樹

印刷者

村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二②東京③一九五二〇八

株式会社
角川書店かど かわ しや ぶん ぽん

電話東京五七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

0193-130701-0946(2)

死　　化　　粧

他 三 篇

渡 辺 淳 一

角 川 文 庫

2790

目次

死化粧

五

訪れ

四二

ダブル・ハート

一三五

翼

二〇九

あとがき

三三三

解説

小松伸六 三四

死
化
粧

一

その日一日、私は休みなく働いた。夕方一休みした時に昨日の午後買った煙草がまだ残っているのを知って今更のようにそう思ったのだ。

午後の廻診を終えた時に、救急車のサイレンと共に交通事故で二人の急患が担ぎ込まれてきた。二人とも子供だった。小学生の兄の方は右頬にカスリ傷を受け、軽い脳震盪（のうしんどう）を起しているだけだったが、三歳の弟の方は、耳と鼻から血が流れ、意識を失い、重篤な脳損傷が疑われた。レントゲン検査の結果は頭蓋骨折であった。直ちに酸素吸入を施し、補液を始めたが二時間程して死んだ。

私が子供の死を確認して病室を出ようとすると、母親が「どうしても助からなかったのか」と涙声で質（たず）ねた。呼吸中枢がやられては死は時間の問題だった。酸素吸入や補液は一応やるだけやってみたという事にすぎないのだ。最初診た時から助かりっこなかったのだ。私はそう言いたかったのだが、暫く（しばら）く母親の愚痴を聞くふりをしながら黙って病室を出た。私の診て感じた本当の事を言ってもこの母親には解（わ）かって貰えそうもなかったし、何よりも既に子供が死んでいる事がすべてを無意味にしていた。しかし母は一向に諦める気配はなかった。三十分後に私の部屋へ死亡診

断書を取りにきたときも「もう少し早く連れてきたら助かったのだろうか」と質ねた。「そうとも言えない。要するにうまくなかったのだ」と答えると「でも酸素吸入を始めた直後は呼吸も楽そうだったのに」と又涙声になった。

私は碁の事を考えていた。碁でも大石の死が決ったからといって直ぐ投了はしない。「死」と決っても尚二、三の手を費して形を整えてから改めて投了する。医師も同じである。死が避けられぬ事は知っていても、尚二、三の手は尽してみろ。酸素吸入や補液はそういった形を整えるための追加手に類するものだと言いたかったのだ。しかしこのような説明は母親を一層興奮させるだけだと思ったので「お気の毒な事をした」とだけ言った。母親は私の受け答えにひどく不満気であった。私を見つめたまま尚動く様子もなかったが、私が書類の整理を始めたので諦めて去っていった。

それから三本程立て続けに煙草を吸った。一日暑さをふり撒いた陽がようやく西の山の稜線に傾いていた。私は昨日買った小児麻痺の流行についての、小さな単行本を取り出すと、両肢をもう一つの椅子にのせたまま読み始めた。

二頁も読まないうちに電話のベルが鳴った。「もしもし」という語尾の重い訃りで、それが兄の声だと直ぐ解った。「今夜弘子姉さんの処で皆が集るのを知っているだろう」私は勿論忘れていない。「七時からと言ったけどもう皆集っているから少し早めに来ないか」と言うので、私は

「直ぐ行く」と答えた。

母が私の勤めている大病院の脳外科に入院してから既に一月になっていた。私が母を受持ってもいいのだが、母と子が医師と患者では却って何かと具合が悪いので、同僚の長谷部が母の主治医になっていた。母の病は私の予想通り、精密検査の結果でも小脳橋角腫瘍しゅようという脳腫瘍の一種であった。小脳橋角という様な脳神経の密集しているところに脳腫瘍が出来て、次々と周りの神経を圧迫していく極めて悪性の病氣であった。

二日前からは父や兄に加え、身近な親戚達も田舎から出てきていたが、今夜七時から姉の処で脳を開く手術を受けるべきかどうかについて皆で相談する事になっていた。私は初め電話でその話を聞いた時も、「病氣の治療は所詮しよせん医師に任せるより仕方がないのだ」と言っておいた。しかし兄達は、「生死の目処めどのつかない危険な手術をうけるのだから、皆で相談して納得した上で決めるべきだ」と言った。実を言うと、私は田舎の人特有の廻りくどい意見をきかされた上、その場で彼等に無縁の医学の細かい事まで説明しなければならぬ事が億劫えいけつでもあったのだ。

六時十分前に病院を出ようとすると、霊柩車が西陽をうけた病院非常口に横づけにされて、午後死んだ子供の遺体が引き取られるところだった。母親が白い布で覆った子供の死体を抱えたまま車に乗り込むのが見えた。「あの子はどうしても助けようがなかったのだ」と私は改めて思った。妙にむし暑かったのでそのまま一町離れたなじみの食堂へ入ってビールを注文すると夕刊

を取り上げた。二人の子供の交通事故の記事が既に載っていた。バスの横合から兄弟が飛び出して内側から来たライトバンにはねられ、弟は三か月、兄は一か月の重傷を負ったと書いてあった。私はそんな事を言った覚えはないが、記者達は自分達は自分達の感でそう書いたらしい。弟が死亡した事は夕刊には間に合わなかったのかもしれない。

姉の家には父と兄をはじめ親戚も含めて六人が集っていた。姉の夫は世話ずきな上に菓子工場を経営していて四、五人は軽く泊れる余裕もあるので、親戚はこの街へ出て来るとよく此処へ泊るのだった。

私が茶の間へ入りかけると兄が「一寸」と右手の離れへ呼んだ。「この前の事だけど考えてみたか」兄はソファへ腰を下ろしながら言った。何の事か私は直ぐには解らなかった。「吉岡さんのお嬢さんの事だ」一週間前に田舎から出てきた時、兄は同じ町の木材業の娘の写真を持ってきて見合をするようにすすめた。私はその写真を研究室の抽斗ひきだしにしまい込んだままなのに気付いた。「お前まだあの女と一緒にいるのか」と兄が私の顔をのぞき込むようにして言った。私は椅子にもたれたまま組んだ脚をふらふらさせていた。黙っていれば適当に判断して呉れる。実際その事に関して、どう判断されても仕方がなかった。「別れる気はないのか、もう三十だろう」その通りだった。「お袋が心配していた。もしこのままお袋が死にでもしたらどうするのだ。親に心配かけるのはもう止せよ」三歳上の兄がこのような言い方を私にする様になったのは、父が兄へ

店をゆずり、母が病いに倒れてからだろうと私は考えた。子供の頃は、二人は何時だって組んで他家の子供達に対抗していた。あの頃は随分と仲良かった筈だ。「おい」と兄が返事を促した。「別に心配して貰わなくてもいいんだが」と私は答えた。「そんなわけにはいかない、世間態だって悪い。まさかあいつ（彼女）と結婚するつもりじゃないだろうな」しかし私は実際すでに同棲しているのだ。「お前も大学出て女給と一緒にすることもないだろう。あんな女は……」私はなす事もなく窓に下がったシェードの横枠を数えていた。二十三まで数えてきて又上へ昇った。何回か数えているうちに兄の苦言は止むと思ったのだ。「勿論お前は違うと言うだろうけど、お袋があんな病氣になったのもお前の事を心配しすぎたのが一つの原因のような気もするんだ」「何度も言うけどやはり貰う気はないのだ」と私は答えた。兄は不思議な物をみるように私の顔を見つめた。この二、三年兄はめきめきと太ってきていた。幼時この兄に私は似ていると言われた。しかし今は体つきも気持も、随分違う筈だと私は改めて丸く血色のよい兄の顔をみて思った。姉がドアをノックして入ってくると「皆様お待ちかねだからそろそろ始めては」と言った。この機会を待っていた様に私は直ぐ立上がった。

茶の間へ入っていくと叔父が真先に「どうだ元気にやってるかい」と質ねた。母は四人姉弟であったが、今は弟であるこの叔父しか残っていない。「特別元氣などというわけではないが」と私はあいまいな答え方をした。兄は皆がテーブルを囲んで席に着くまで黙り込んでいた。つい今

さっきまでの私との会話が兄を不機嫌にしているに違いなかった。姉が子供を女中に渡して戻ってくるのを待って、皆の前で兄は初めて口を開いた。

「実は主治医の先生は手術をすすめるらしいのだが、きくところによると可成り危険な手術らしい。それで本当に危いものなら止めたいと思うのだ」「やはり相当に危険なのかね」と父が私に向って言った。「そう思う」と私は答えた。「しかし奇妙な病気もあるものだ、目も見えなくなる、耳も遠くなる、今はもう水もよく飲み込めないらしい」叔父は病の進む方にあきれながら感心していた。田舎で魚市場の社長をしているこの叔父に、幼時私は可愛がられて過した記憶がある。気っぷが良く人情家で人に奢る事が好きだった。田舎へ帰れば有力者で通る叔父も母の病気にはすっかり参っているのだった。

それからは長々と、とりとめのない話が続いた。成功の確率が三割以上ならしてもらおうかと兄が言った。危いと思ったら直ぐ手術を止めてもらうのだと父が言った。手術の前に思いつき好きなのを食べさせようと姉が言った。一度田舎へ連れて帰って皆に逢わせてからにしようかと叔父が言った。

母は既に視力、聴力だけでなく物を飲み下す嚥下^{えんか}神経までも侵されていた。腫瘍^{しゅよう}がもう五耗^{ごこう}も発育すれば呼吸を司る神経までも侵されて死んでしまう。この病気の文献を少しでも調べれば、あと幾日くらいで死ぬかという事は簡単に予測する事が出来た。私は既に読めるだけの文献を読

み尽していた。せいぜいあと三十日と私は推定した。この日数のうちに母の死は誰との約束よりも固く確実に訪れてくるに違いなかった。私が、医師を志してから十年になっていた。この間に得た様々な知識はそのままこの予想を確信する裏付けになっていた。長谷部達の言うように、手術をしても大して変りはない筈だった。脳のこの部分の腫瘍は決して取りきれるものではない。慎重に慎重によりやく三分の一を摘出しても、只それだけの脳への刺激で二十四時間以内には殆どが死亡している。今迄成功した例は一例もないのだ。要するに今の段階ではこれという極め手はないのだった。

長々とした話が一時間も続いた。話をしながら皆は病気の恐しさに今更のように驚き、その進み方に畏敬の念さえ持っているのだった。「それでお前はどうかしたらよいと思うのか」と最後に父が私に質ねた。私は「特別言う程の事はないが、前にも言った通り医者に任せるより仕方がないと思う」と答えた。どう言っても、結局は手術をするかしないかの二つに一つだった。本当を言うとならばそれさえどうでもいい事だった。いずれにせよ母の死が避けられない事を私は誰よりもよく知っていた。

「じゃ手術をせよという事だね」と父が言い、「失敗してもとにかくやれということだね」と兄が言った。私は黙って新しい煙草に火をつけた。誰も一言も言わなかった。沈黙が私の答を促していた。

「どちらにしても結局同じ事なのだよ」私の言葉の意味を彼等は直ぐには理解できなかったようだ。暫くして「同じ事だと言うのは」と兄が質^{たず}ねた。どちらにしても母は助からないのだ。そう言いかけて私は口をつぐんだ。其の時私は母の目の前の死を悟り、信じきっている自分という存在が此処に集っている人達とは別に、何か為^な体の知れないかけ離れたものに思えたからだ。

「助けてやりたいな」と父が呟^{つぶや}いた。

此処に居る人達は皆、母の病を治す事を考えている。それは全く見当違いな考えであった。それが誤りであることを皆に解^とけて貰^{もら}いたいと思った。しかしそうした説明をいかに上手にしたところで母の命は助かるわけではなかった。私は只、母がどう思っているかだけを知りたかった。

「母さんは手術を受けたいと言っている」父が答えた。「それなら問題はないわけだ」私はもうこの話はやめたかった。皆の話を聞きながら少しずつ私はある恐怖に把^とられていたのだ。

皆は母の死を怖^{おそ}れている。しかし私が恐れているのは母の死ではなかった。母の子供達の中で私だけが母の死を知り、母の死を信じている。母が死ぬ事を誰よりも確かに信じきっている自分が怖^{おそ}かったのだ。私も皆と同じ様に、このまま脳の腫瘍が溶けてなくなるのではないか、手術で脳を開いて腫瘍を摘^とみ出せばいいのではないか、等と話し合^あって母の生を願^{ねが}う事が出来ないのだろうか。万に一つでもそんな可能性を、何故私だけが信ずる事が出来ないのだろうか。

六人は黙^{もく}り込んだまま時が過ぎていった。父は額^{ぬく}に手を当て、兄は頬^ほづえをつき、叔父は煙草

を重ね、姉と叔母はうつむいたまま、皆が一様に考え込んでいた。その一人一人を見廻しているうちに私は自分が彼等とは遠い別の世界に住んでいるに違いないと思い始めた。

私は此処にいる人達とは深い血が繋がっているはずだった。しかし気持の上では少しも通じ合っているところがなかった。ひょっとすると自分は何処か別の宇宙から迷い込んだ別の人間なのではないだろうか。父も兄も姉も皆母の生を信じ、生き長らえる事を願っている。だが私だけは無味単調な死の世界から母の死を告げに來ている。死の使いは何も言わなくてもおのずから周囲へ死の匂をまき散らしているのではないか。私は死の世界から冷たい無機物のような表情をつけてまぎれ込んできている。沈黙の中で私は、今迄一緒だと思っていた人達から離され、灰色の不毛の世界へ引き戻されていくような錯覚を覚えた。

二

翌日の昼、医局で明日の手術の予定を組んだ。「お袋さんの手術に入るか」と医長が質ねた。私は自らメスを執って母の脳を開く気持はなかった。しかし病巣だけはよく見究めておきたかった。「見学させて貰います」「ともかく助手で入るか」それで医長、長谷部、私という三人のメンバーで手術をする事に決った。

夕方五時に母の病室へ行った。病室には父を始め親戚、そして田舎での母の茶飲み友達まで、

七、八人の人がベッドの周りに人垣を作っていた。

「今度快くなったら皆で野中温泉に行きましょう、小原さんも清川さんも皆張り切っているから」「勝彦のね、”お婆ちゃん”という綴り方がとても上手だったので先生が皆の前で読みあげたんですよ」「秋には一度旦那さんと関西旅行にいく筈だったでしょう」様々な励ましの言葉が母の耳元に口を寄せるようにして告げられた。母は辛うじて聞えるのか、そうした呼びかけに只首肯^{うなず}していた。私は人垣の後ろから母を見つめていたが、毎日診ていた私にさえこの一か月の憔悴^{せうすい}は手に取るように解った。腫瘍細胞は今、この瞬間も休まず増殖を続け、母の養分を吸いつくしているに違いなかった。

午後六時に面会時間はこれで終りだと看護婦が告げに來た。私達は順々に母と手を握り合って一言、二言、言葉を交して部屋を出ていく事になった。

「きつと快くなるからね」「頑張ってるね」「明日の今頃になったらもう笑って話が出来るよ」人はそう言っては母の気持を引き立て、そして自分の手術への不安も打消そうとしていた。母はその言葉に一々首肯しながら各々に小さな声で礼を言った。私の番が來た。母は掌を触れただけで直ぐ私だと解った。母へは沢山言う事があると思った。これまでのすべての我儘を許して貰いたかった。しかし沢山あるという事は何もないという事でもあった。私はただきつく母の手を握った。これでもう生きている母の掌を握る事はないと思った。子供の頃、この母の掌で燈を遮^{さへぎ}つ